

From Linguistic Relativity to Cognitive Relativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1013

言語相対論から認知相対論へ

中 村 芳 久

0. はじめに

サピア・ウォーフの仮説はそれが提案された時代とその言語理論的背景のために理論的にナイーブな面を含んでおり、この点を集中的に批判すれば、例えば言語普遍論や言語能力生得説などの優位性を説得的に議論できる。ピンカーの議論にもこのような側面があって、その著 *The language instinct* の第3章において、70年代から80年代にかけての認知科学（のいわゆる第2世代）の立場¹から、この仮説を徹底的に批判している。その批判に的確な面はあるが、その延長上でサピア・ウォーフの仮説で問題にされていることがすべて解決されるというわけではない。未解決の問題は、認知科学のもっとも新しい第3世代が追究していることと密接に関連する問題であり、本論では、このような問題をも視野に収めた観点として認知相対論とでも呼べる考え方を提示し、その可能性と発展性を探る。

第1節では、普遍的認知主義と経験主義の統合である認知言語学に基づく認知相対論の考え方を図式的に提示し、第2節では、言語相対論再考の気運の高まり（Lee 1996, Gumperz & Levinson 1996, 大田2000など参照）が見られる中、サピア・ウォーフ仮説の認知的な読み直しを行い、ピンカーの相対論批判とも突き合わせながら、とりわけ空間概念の習得という視点から、認知相対論の可能性を探ってみたい。

1. 認知相対論

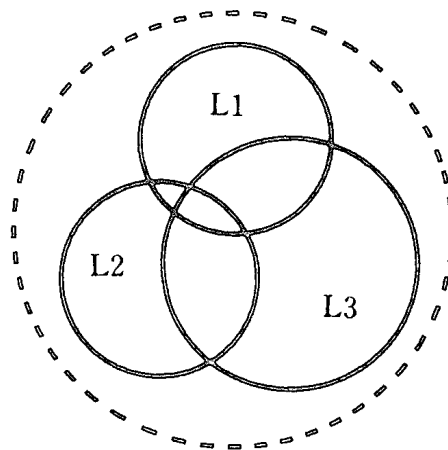
サピア・ウォーフの仮説は、「言語がわれわれの思考を決定する、あるいはわれわれの思考に影響する」というものであり、これに認知言語学の観点つまり「言語にはわれわれの認知能力や認知プロセスが反映している」という観点を加味するとどうなるか。サピア・ウォーフの仮説に、認知言語学の観点を代入すると、「言語が、（言語に反映している）認知能力や認知プロセスを決定する（あるいは影響する）」ということになる。しかしながら、人間固有の認知能力や認知プロセスは、生得的なものであるから、生後に接触する

言語によって、生得的であるはずの認知能力や認知プロセスが決定されるというのは、いかにもおかしい。

しかし「決定する」「影響する」という部分を、認知言語学的観点を基に次のように読み直してみると、その妥当性を十分認めることができる。すなわち、可能な認知能力や認知プロセスのうち、各言語が中心的に活用する認知能力や認知プロセスが異なるということである。言い換えるなら、言語に反映する基本的な認知能力と認知プロセスは人間共通であるが、どの能力が中心的に用いられるかということ、また特定の認知能力によって、どのような捉え方がなされるかということに、言語によってヴァリエーションが生じるということである。

いま色彩語を例にとると次のようになるだろう。われわれの視細胞は、400から700ナノメートルまでの波長の光とその色彩を捉えることができるが、どのあたりの波長の光に注目して言語化するかは、自然環境や文化社会に応じて異なるということである。視細胞（錐体細胞）には緑と黄と赤に反応する3種類があり、当然これらの色彩認識が優先されるから、ロッシュの研究が示すように、各言語の色彩語はてんでんばらばらにあるのではなく、プロトタイプ (focal colors) を共有しながらバリエーションをもつということになる。各言語間の色彩語の異なりは以下のように図示されよう。

(1)



外周の破線の円は人間に認知可能な色彩感覚領域であり、その中のどのような色彩に注目し言語化するかが、各言語 (L1, L2, L3, ...) によって異なるということである。次のようにも言うことができる。人間には共通の色彩認識能力があって、それによってさまざまな色彩が認識可能である。この認

識能力によって認識可能なさまざまな色彩の全体が外側の破線の円で示される。このような認識可能な色彩のなかで、注目され言語化される色彩が、実線の円 (L1, L2, L3, ...) で示されるように、言語間で異なるというわけである。それぞれの円に共有部分があるのは、焦点色の色彩語がほとんどの言語に共有されるためである。

さてサピア・ウォーフ仮説の「言語が異なれば思考が異なる」という部分は、色彩語を例にとると、認知相対論的には「言語が異なれば（当該言語に存在しない色彩語の色彩が認識されないというのではなく）、注目され言語コード化される色彩が異なる」ということになる。この観点を「認知相対論」として一般化し、次のように整理しておこう。

- (2) 認知相対論：言語は、人間に普遍的な認知能力や認知プロセスを反映しているのであるが、どの認知能力を強く反映し、また認知プロセスのどのような指向性を強く反映しているかという点で言語間で異なっている。

少し言語面に着目して上の認知相対論の観点を具体的に見ておくことにしよう。まず Wierzbicka の一連の研究がある。言語には認知能力や認知プロセスが反映しており、その反映の仕方が言語や言語表現によって異なるという主張は、Langackerの認知文法だけのものではない。Wierzbickaは、語彙や構文だけでなく文化的概念まで、実に見事な意味分析を行っているのであるが、例えば Wierzbicka (1988: 293)では、“[verbal expressions]...reflect different possible conceptualizations of the same situation”(認知主体が同一の事態をどう捉えイメージするか、そのさまざまに可能な捉え方が個々の表現形式に反映している)と述べて、自動詞文と have a V 構文(e.g. *John walked.* vs. *John had a walk.*)の対照を行っている。この引用で重要なのは、叙述内容や描写内容の違いではなく、話し手である認知主体が対象としての事態をどう捉えたかという捉え方・認知プロセスの違いがそれぞれの言語表現に反映しているということである。したがって、次の2文も異なる捉え方(conceptualization)、異なる認知プロセスを反映しているというわけである。

- (3) a. John cried.
b. John had a cry.

(3)(a)(b)いずれも、外面的には同一の事態を叙述しているが、(b)の *have a cry* は、主語参与体が泣くという行為というよりは「気持が楽になった、すっきりした」という主語参与体の心的経験をより強く表すというのである。主語参与体に注目すると、自動詞文の主語参与体は、動作主として捉えられ、have a V 構文の主語参与体は経験者として捉えられているとすることができる。このように、構文の異なりは、捉え方 (conceptualization) の異なりを反映しているというわけである。さらに例えば、犬を撫でる場合でも、この犬は毛並みがよくて気持がいいから撫でてごらん、と言うときは、“Just have a stroke of it!”のように have a V 構文が用いられる。これに対して、犬を撫でて犬の方を気持よくさせるような場合は、“Give it a stroke!”のように give a V 構文が用いられる (Dixon 1991: 350)。後者の場合、犬が、撫でられて stroke を持つことになり、気持がよくなるというわけである。

Tannen(1992, 1994)は、男女間の言語行動差に関する膨大な研究を行っているが、この研究も、男性と女性が同一の発話をどのように捉えるかという捉え方の問題に帰着する。厳密に言えば、当該発話をどのようなメンタル・スペースに置いて解釈するかという認知プロセスの問題である (cf. Fauconnier 1997)。例えば、困った状態にあるときに受ける思いやりや同情の表現を、女性はそのまま受け取ることが多いが、男性は「見下し」(condescension)として受け取ることが少なくないらしい。彼女によると、男性は他者を常に自分と比べて上か下かという観点 (one-upmanship) で捉えており、そのような世界観を背景に発話を解釈するためにこのような受け取り方になる (Tannen 1992: 24-5)。つまり男性の場合、困っている自分はふつう相手より下に位置付けられるから、相手は一段上になることになる。その相手から出てくる同情表現は、往々にして「見下し」表現として受け取られるというわけである。相手の発話をどのような世界像 (メンタルスペース) に置いて捉えるかということは認知プロセスに他ならず、自動詞文と have a V 構文という異なる文型に異なる認知プロセスが反映していたように、男女の異なる発話解釈も異なる認知プロセスを反映しているわけである。

中村 (1998) は、日英語を認知類型論的に捉えようとする試みである。よく知られているように、Li and Thompson(1976)に従えば英語は主語優先の言語、日本語はどちらかといえば話題優先の言語である。また池上(1981)によれば英語は「する」的言語、日本語は「なる」的言語である。それぞれの類型論は、言語形式に注目する形態的な類型論、意味に注目する意味論的な類型論であるが、認知的観点からそれぞれの言語にどのような認知プロセス

が強く反映しているかという点からすると、英語はトラジェクターやランドマークのような際立ちの強さで参与体を捉える傾向があり、日本語は参照点と認知的標的の関係（参照点関係）で対象を捉える傾向が強い。認知類型論的に、英語を際立ち反映型、日本語を参照点反映型とすると、三種類の類型論は以下のように整理して示すことができる。

(4)	英語	日本語
形態論的類型論	主語優先	話題優先
意味論的類型論	する言言語	なる言言語
認知的類型論	際立ち反映型	参照点反映型

証拠となる代表的な現象に次のようなものがある(中村 1998)。次の(5)のような英語の他動詞文は、日本語では、(6)のように他動詞文が不可で、(7)のように「話題＋自動詞文」になる。

- (5) a. My guitar broke a string.
b. The stove blew the fuse.
- (6) a. *私のギターが弦を切った。
b. *その電熱器がヒューズを飛ばした。
- (7) a. 私のギターは、弦が切れた。
b. その電熱器は、ヒューズが飛んだ。
- (8) a. *My guitar, a string broke.
b. *The stove, the fuse blew.

英語では(8)のように他動詞文の主語を話題で表すことはできないから、形態的には英語は主語優先で、日本語は、(6)のように他動詞文が許されないから話題優先だというわけである。また「する」的な他動詞文を(7)のように「話題＋自動詞文」で表すと、例えば「ヒューズが飛んだ」の部分は「なる」的である。従って、意味論的類型論では、英語は「する」的、日本語は「なる」的だというわけである。認知的には、他動詞文はトラジェクターとランドマークをそれぞれ主語、直接目的語で表しており、英語はこのような際立ちの強さでいわゆる文法関係を決定しているが、日本語の「話題＋自動詞文」の意味構造は参照点（と認知的標的）の関係を反映しており、日本語は参照点反映型だというわけである(中村 1998：256-7)。(最近の池上(2000：第二部)

の研究では、構造上の主語優先 vs. 話題優先の対立が、意味的な「する」vs. 「なる」、有界 vs. 非有界、動作主 vs. 感受者 (sentient) との対立と関連性があり、さらには以上の対立がモノ vs. トコロの対立とも並行的であることが論じられている。)

以上の Wierzbicka, Tannen, 中村のような研究はいずれも認知相対論に属すると言ってよい。われわれには同一の事態を行為として捉えることも、経験として捉えることもできる。すなわちそのような2種類の認知の仕方が普遍的に備わっているのだが、自動詞文に対する have a V 構文では後者の認知の仕方を強く反映しているというわけである。また女性も男性同様、他者を自分より上か下かで捉える認知プロセスはあるのだが、それが女性の発話解釈に頻繁には登場しないということである。そして日本語話者も英語話者も参与体をトラジェクター/ランドマークで捉える認知能力も参照点関係として捉える認知能力も持っているのだが、日本語には後者が、英語には前者がより強く反映しているということである。

既に予測される通り、認知相対論は、普遍論と相対論の折衷である。すべての人間には予定された認知能力と認知プロセスが備わっているという点では普遍論的であり、どの認知能力、どの認知プロセスがより活性的であるかが言語によって異なるとする点では相対論的である。しかし、後に見るように、例えば普遍的な空間認識能力によって獲得される原空間概念と言語を通して獲得される空間概念との境界や接点が明白でないことから明らかなように、普遍的な認知能力の相対的な顕在化 (認知相対論) によって、言語内・言語間で異なるすべての概念形成が説明可能かどうかは検討を要する問題である。

2. 認知相対論の可能性

サピア・ウォーフ仮説の「思考を決定する」「思考に影響する」という部分は、「思考」とは何か、「決定する」「影響する」とはどういうことであるかという点でさまざまな解釈を許し、あいまいである。したがってこのような点を明確に意識して議論する必要がある。「習得」という観点を導入することによって、あいまいさを排除できることも確かである。思考が概念 (例えば「黒板消し」というような概念) であるとするならば、このような概念は言語や文化を通して習得されるであろう。しかしそれが「同じ・異なる」のような概念であるなら、それは生命体が異物から自己を守り自己を維持するための根本概念であろうから、この種の概念は生得的に備わっていて、それが人間

の場合言語化され、さまざまな用法へと拡張しているのであり、言語を通して習得される概念ではない、ということになる。また思考が三段論法のようなものであるとするなら、これも言語を介して習得されるとは考えにくい。

ここでは、ピンカーのような認知論的立場からの言語相対論批判を検討し、われわれが言語から独立した形で概念や「思考」の世界を持っているということになっていった歴史的な経緯を見ていくことにする。しかし、言語相対論的に捉えざるをえない現象も依然として存在するわけで、それとの関わりで認知相対論的観点の必要性、妥当性を論じることにする。また、Bowerman (1996) の空間概念習得の論考を基にすると、色彩語に基づく認知相対論の上の図式は若干変更を迫られることになる。

2.1 ピンカーの言語相対論批判

The language instinct 第3章でのピンカーの言語相対論批判はてきびしく、言語相対論は“wrong, all wrong”だと決めつける。その批判の妥当性を見よう。まず、一般にサピア・ウォーフ仮説には、言語決定論とその weaker version である言語相対論とがあり、それぞれについてピンカーは次のように捉えている。

- (9) ...the famous Sapir-Whorf hypothesis of linguistic determinism, stating that people's thoughts are determined by the categories made available by their language, and its weaker version, linguistic relativity, stating that difference among languages cause differences in the thoughts of their speakers.

(*The language instinct*, p. 57).

言語決定論に対して言語相対論が weaker version であるということは次のように考えることができる。言語決定論は「言語がわれわれの思考を決定する」ということであり、これを p とすると、「言語が違えば、思考が違う」ということ（これを q とする）との関係は、一般に p entails q ということになる。むろん「言語が違えば、思考が違う」(q)ということがあっても、そのことから「言語が思考を決定している」(p)とは言えないため、q entails p は成立しない。このようなことを称して、p は q よりも強い主張だというのであろう。p は言語決定論、q は言語相対論であり、q の方は言語が思考に影響を与えるという程度に捉えておいてよい。

ところでサピア・ウォーフ仮説の要点は以下のようである。

- (10) We dissect nature along lines laid down by our native languages. The categories and types that we isolate from the world of phenomena we do not find there because they stare every observer in the face; on the contrary, the world is presented in a kaleidoscopic flux of impressions which has to be organized by our mind—and this means largely by the linguistic systems in our minds. We cut nature up, organize it into concepts, and ascribe significances as we do, largely because we are parties to an agreement to organize it in this way—an agreement that holds throughout our speech community and is codified in the patterns of our language. The agreement is, of course, an implicit and unstated one, but its terms are absolutely obligatory; we cannot talk at all except by subscribing to the organization and classification of data which the agreement decrees. (Whorf, Benjamin Lee. 1956. "Science and linguistics." John B. Carroll, ed. *Language, thought and reality*. MIT. p.213.)

「われわれは、生まれつき身につけた言語の規定する線にそって自然を分割する。われわれが現象世界から分離する範疇とか型が見つかるのは、それらが、観察者にすぐに面して存在しているからというのではない。そうではなくて、この世界というものは、さまざまな印象の変転きわまりない流れとして提示されており、それをわれわれの心——つまり、われわれの心の中にある言語体系というものと大体同じもの——が体系づけなくてはならないということなのである。われわれは自然を分割し、概念の形にまとめ上げ、現に見られるような意味を与えていく。そういうことができるのは、それをかくかくの仕方で体系化しようという合意にわれわれも関与しているからというのが主な理由であり、その合意はわれわれの言語社会全体で行なわれ、われわれの言語のパターンとしてコード化されているのである。もちろん、この合意は暗黙のもので明文化などはされていない。しかし、ここに含まれている規定は絶対的に服従を要求するものである。この合意に基づいて定められているようなデータの体系化や分類に従うことなしには、われわれは話すことすらできないのである。」(池上嘉彦訳『言語・思考・現実』講談社学術文庫。p.153.)²

この引用に基づけば、言語によって決定され、あるいは言語から影響を受けるのは、より直接的には、われわれの「思考」(三段論法のような)ではなく、カテゴリー化のあり方であり、それを通しての諸概念であるように思われる。(したがってピンカーの批判のうち、言語が「思考」を決定し、影響するという点に対する批判は、注3に紹介し若干の議論をするにとどめる。)

ピンカーの指摘するサピア・ウォーフ仮説に対する直接的な批判は、以下の色彩語と色彩認識に関する研究に基づいている。この研究の具体的側面を少し見ておくことにしよう。サピア・ウォーフ仮説に従えば、ある言語で色彩語を欠いた色は認識されないということになる。しかし実際は、例えば黄色や赤色のような色彩語のない言語の場合でも、レモンや消防車の模型を見せて、それぞれの色がパレットのどの色と対応するか尋ねてみると、ちゃんとパレットの黄色や赤色と対応させる。このような事例を指摘することによって、色彩語が欠けていても、その色彩が認識されていることを示すのである。これは、色彩語によってわれわれの認識する色のカテゴリーが決定されていないことを強く示唆しているわけである。

また Berlin & Kay(1969)や Rosch(1973)の色彩語の研究は、われわれの色彩認識のあり方が、言語の色彩語の種類や数に反映していることを示しているが、これは言語が(色彩)認識を決定するとするサピア・ウォーフ仮説とは逆の主張である。言語に色彩語が2つしかないときは、白と黒を表す語であり、色彩語が3つの場合は、白と黒を表す語に赤を表す語が加わり、色彩語が4つの言語では、それに黄か緑のどちらかを表す語が加わり、5色になると黄と緑のどちらの色彩語も持つことになる。6色の言語では青を表す色彩語が加わり、7色の言語では褐色が加わり、8色以上になると紫、桃色、橙、灰色を表す色彩語が加わる。このことは、言語の色彩語がまったく自由にあれこれ存在するのではなく、黒を背景にした白に(あるいはその逆に)強く反応する視細胞、緑を背景にした赤に(あるいはその逆に)強く反応する視細胞、青を背景にした黄に(あるいはその逆に)強く反応する視細胞のような3種類の視細胞の存在をうまく反映していると言える。要するに、色彩語の存在は、われわれの色彩認識のシステムを反映しているということである。概念によって思考の全体あるいは一部分が形成されているとしても、概念はわれわれの認知能力と認知プロセスによって形成されるのであるから、この場合の思考も認知能力や認知プロセスによるものということになる。以下の(II)のようなことも繰り返し言われることであるが、そこでの思考の異なりも、認知相対論的であると言える。

- (II) 文学者が考へることは即ち書く事であり、巧みに考へるとは巧みな言葉によって考へるということに他ならぬ。そこまで行かなければ文章は生きてこない。

まず考へ次にこれを言葉にするという呑気な考へ方から、文学者は出なくてはならない。さういう呑気な考へ方が、例えば画家についても、画で表現しようとする思想が先ず画家の精神のうちにあり、これを色で翻訳したものが画だという風な考へ方をさせるのであるが、画家は実際には決してさういう事はしてはいない。色を塗って行くうちに、自分の考へが次第にはっきりした形を取っていくのである。(小林秀雄『現代文学論』)

このような作家の表現が、よく言われるように「意識されてはいたがいまだ表現されなかったこと」であったり、その表現内容が読み手にちゃんと理解されるのであれば、それは、黄色や赤の色彩語がなくても黄色や赤が認識できている場合と同じで、認知相対論的である。(しかし、この場合におけるこのような観点の若干の問題は、2.4節「言語相対論の再評価」での論点と関連する。)

色彩語がサピア・ウォーフ仮説を否定する現象であること、そして認知相対論的な考え方を導入することによってうまく説明できることはすでに見た通りであるが、色彩語についての次のような2つの側面は依然として言語相対的である。

一つは、各色の焦点部からどの程度離れたところまでを同一の色彩語で呼ぶかという点で、これは言語相対的であり言語文化を通して習得されることである。有名なところでは、日本語の「青」は緑に相当する部分までに対応しているということ、また日本語では褐色を「赤」と呼ぶことがあり、「赤砂糖」は英語では *brown sugar* である。(また太陽の色を「赤」と「黄色」のいずれで捉えているかなどは、次の「連想」との関係においても興味深い。)

もう一つの側面は、色彩語と連想の関係であり、これも言語相対的であり、言語文化を通して習得するほかない。例えば英語の *pink* には「血色がよい」すなわち「元気な」という連想があるが、日本語の「ピンク」にはそのような連想よりはもっと別の連想がある。色彩語から何が連想されるかということが言語によって大きく違うことは十分想像されることであるが、もしそうであるなら、色彩からの連想の違いは、言語相対的ということであり、その連想は当該の言語や文化社会を通して習得するということになる。また「真っ赤な嘘」や *red tape* のような色彩語の用法も、特定の言語文化を通して習得

されるのであろう。

このような現象を「恣意的」であるとしてかたづけることもできるが、そこに何らかの「認知的動機づけ」、すなわち、このような連想一般を司る普遍的な認知能力や認知プロセスが存在し、その適用が言語間で異なるのかどうかということは、認知相対論の今後の課題である。確かに、われわれのカテゴリー認識の仕方には、プロトタイプから周辺までを含めるような連続的なカテゴリー化の仕方があって、このカテゴリー化によって周辺としてどのあたりまで含めるかが言語間で異なるのではないかということは言えるであろうし、また、連想の方も、われわれに「連想する」という認知能力があって、何をどう連想するかは言語によって異なるということはできる。プロトタイプと周辺との関係、連想ということの具体的なメカニズムについては（認知域やメンタル・スペース間の連合、メタファーやメトニミーに関する認知能力とも関連づけて）厳密な議論が必要である。⁴（認知文法の枠組みでいうと、例えば、あるモノのどの部分を際立てて認識するかということは、ある程度の恣意性は認めなければならないかもしれないということである。それはつまり、少なくともその側面は、言語相対論的だということである。）

2.2 70年代以後の認知主義

ウォーフの言語決定論とピンカーのとりような認知決定論の拮抗関係を歴史的に眺めるとどうなるか。とりわけ概念習得の観点から整理しておくと、Rosch(1973)の basic level categories の発見に基づいて、Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem(1976)は、基本レベルカテゴリーを中心に我々は概念世界を形成していくのであり、いわゆる意味の世界はそれほど恣意的でないと指摘し、さらに Rosch & Mervis(1977)の研究によると、子どもは基本レベルの概念を、その語彙を習得する以前に獲得しているとのことである。このような研究は、概念発達に関して、言語からというよりもわれわれに備わっている認知能力を通して概念の獲得と発達が生起していることを示している。また Berlin & Kay(1969)の色彩語に関する研究でも、すでに示したように、色彩語が言語によって無差別に存在するというよりも、われわれの視覚の認知システムに準じて色彩語の存在が系統立てられているということである。

このようなことから、70年代の始め頃から、ことばの意味の世界がわれわれの概念世界を形成するというよりも、われわれに備わっている視覚システムや認知システムの反映として言葉の意味の世界があるという考えに変わっ

ていく。したがって、言語獲得は、概念世界がまず出来上がって、それに対応する特定言語の語彙や文法要素を探し当てていくという形で、進行するということになる (Bowerman 1976、Cromer 1974、Johnson 1985)。

2.3 空間概念の習得

とりわけ空間概念の獲得については上の点が強調されてきた。Gibson & Speke(1983)、Needham & Baillargeon(1993)、Piaget & Inhelder(1985)、Van Geert(1985/6)では、空間語彙が使用される前に子どもたちがすでに空間概念を獲得していることを強く主張している。また、Clark(1973)は、物体の位置の知覚と概念化が、物体の形体特性 (たとえば、上下、前後、左右、あるいは横たわっているか立っているかなど) や環境特性 (重力の作用など) に強く制約を受けることを明らかにした。さらに空間語彙は、このような空間知覚に影響を受けて成立しているから、子どもの空間語彙の獲得は、先行する空間概念に当該言語の空間語彙を対応させるという形で進行するということになる。Slobin(1973)は、空間概念が獲得されて始めて、空間表現の獲得が始まるのであり、その逆ではないことを示した。しかも、空間概念が獲得される際に、より単純な空間表現から獲得されていくということである。また Johnston(1985)、Johnston & Slobin(1979)、Slobin(1985)によると、最初に獲得されるのは、containment(を表す *in*)、support と contiguity(を表す *on*)、occlusion(を表す *under*) のような機能的関係表現であり、次に上下、前後を持つものの *proximity*を表す *next to*, *beside*, *between*, *behind*, *in front of* などの位置関係表現が、最後に前後、上下を持たないものについての *proximity* 関係表現が獲得される。また興味深いのは Clark(1973)のある実験で、*in*, *on*, *under* のような空間語彙を獲得していない子どもに、「中におけ」「上におけ」「下におけ」という指示を出すと、置く場所にくぼみがある場合には中に置き、置く場所が平べったい場合には上に置くが、「下におけ」という指示には従えないことがあったという。これなどは、まさにモノの形状がある位置を際立たせ、そのため子どもはそこに注目して、そこに指示された物を置くということなのであろう。

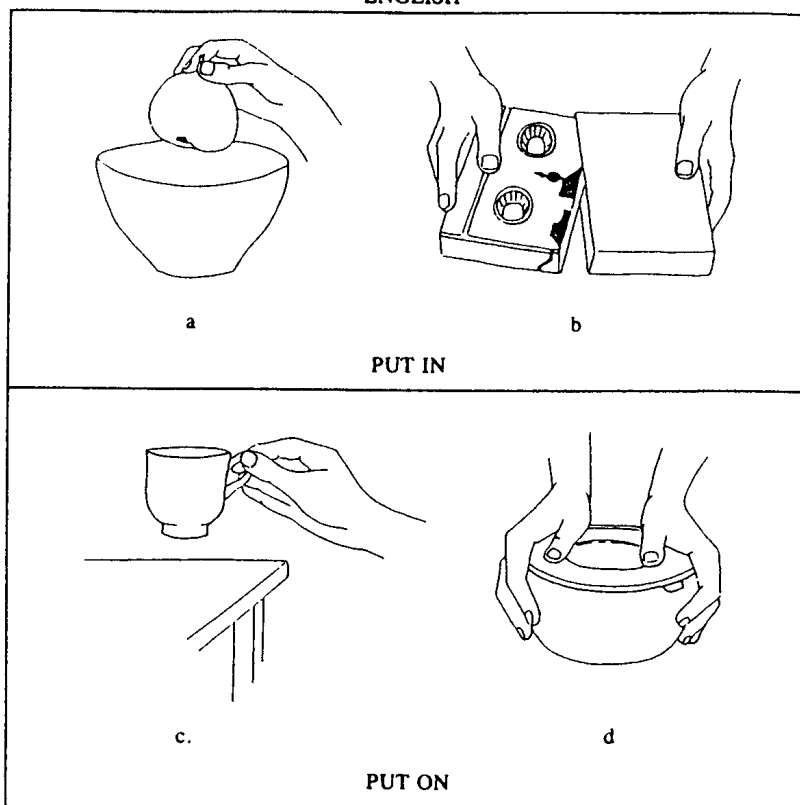
以上のことは、認知的に獲得した空間概念に、当該言語の空間表現を対応させるということを示しているようである。

2.4 言語相対論の再評価

このような結論に再考を促すものに Bowerman の一連の研究がある。言

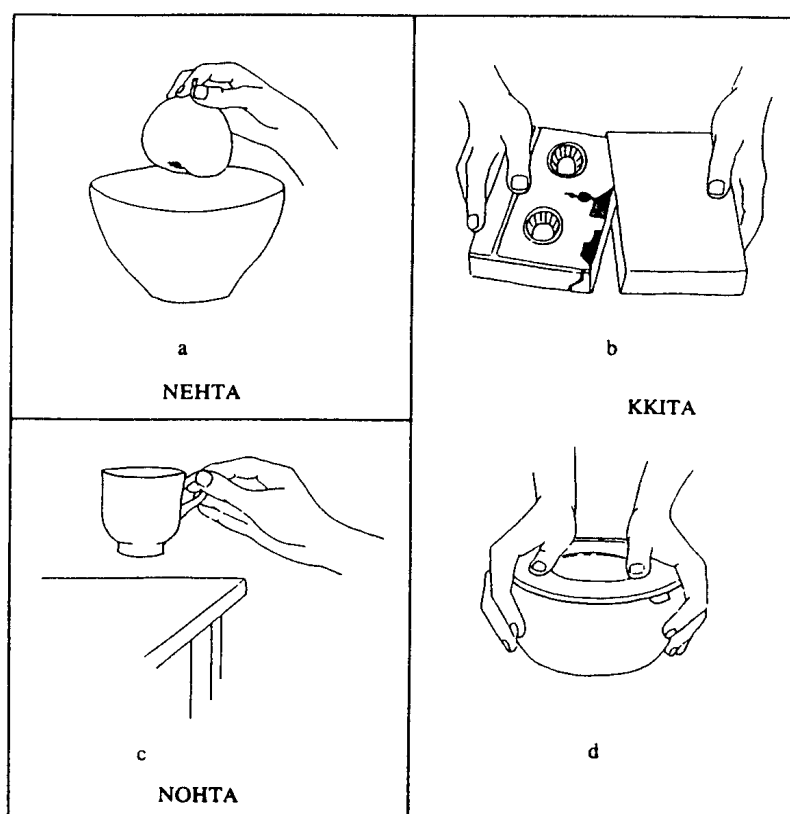
(12)

ENGLISH



(13)

KOREAN

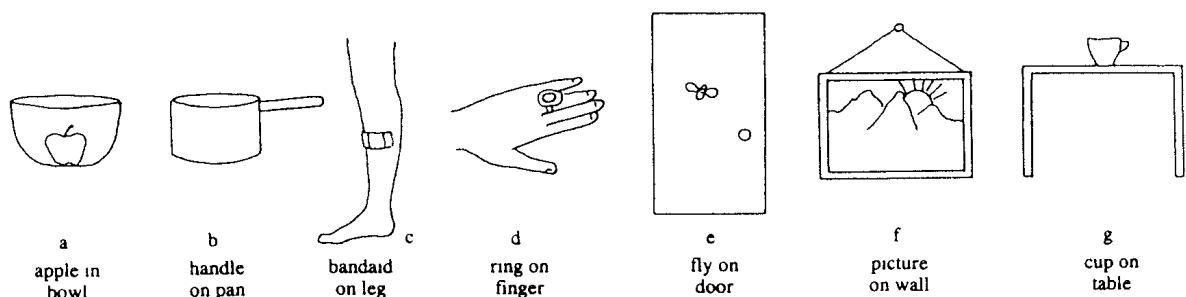


語によって異なる空間表現と空間概念の多様性についての詳細な研究であるが、Bowerman(1996)の議論を追ってみよう。まず「中に入れる」「上に置く」のような空間的行為のカテゴリー化である。英語では、(12)の図のように *put in* と *put on* に分けてカテゴリー化するところを、朝鮮語話者は、(13)の図が示すように、3種類のカテゴリー化を行う (Bowerman 1989, Choi and Bowerman 1991)。

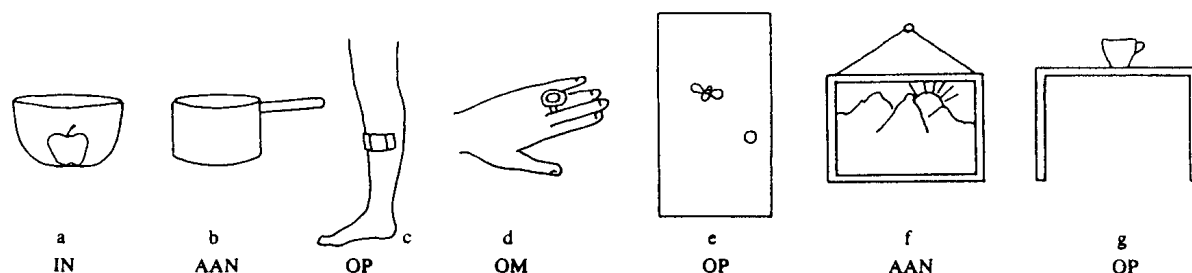
朝鮮語では「カセットをケースに収める」「蓋をつぼにかぶせる」が英語とは異なる空間行為としてカテゴリー化される。つまり、移動体と着点が一体化する場合は、同じ空間関係でも朝鮮語では異なったカテゴリー化がされると言ってもよい。

次は、英語とオランダ語の空間関係表現の比較である。英語では、(14(a))の containment のみが *in* で表され、そのほかはすべて *on* である。つまり、図に示したような2つの物の位置関係は、(a)とそれ以外の2種類にカテゴリー化されるということである。これに対して、オランダ語(15)では、IN, AAN, OP, OM の4種類にカテゴリー化されるということができる。より細かく見ると、英語の IN カテゴリーは、オランダ語でも IN カテゴリーであるが、英語の ON カテゴリーが、オランダ語では3種類にカテゴリー化されるというわけである。たぶん、周囲が関与してくると OM でカテゴリー化され、バンドエイドやハエなどは、それらに付着する力があるので OP でカテゴリー化され、取っ手や壁に掛かった絵はそれが自らは付着力がなく支えられているので、AAN でカテゴリー化されているようである。このような細かいカテゴリー化は、どのように習得されるのだろうか。つまり、認知的な概念化が先行して、言語表現が対応させられるのだろうか、それとも言語表現を通して、このようなカテゴリー化を学習していくのであろうか。

(14)



(15)

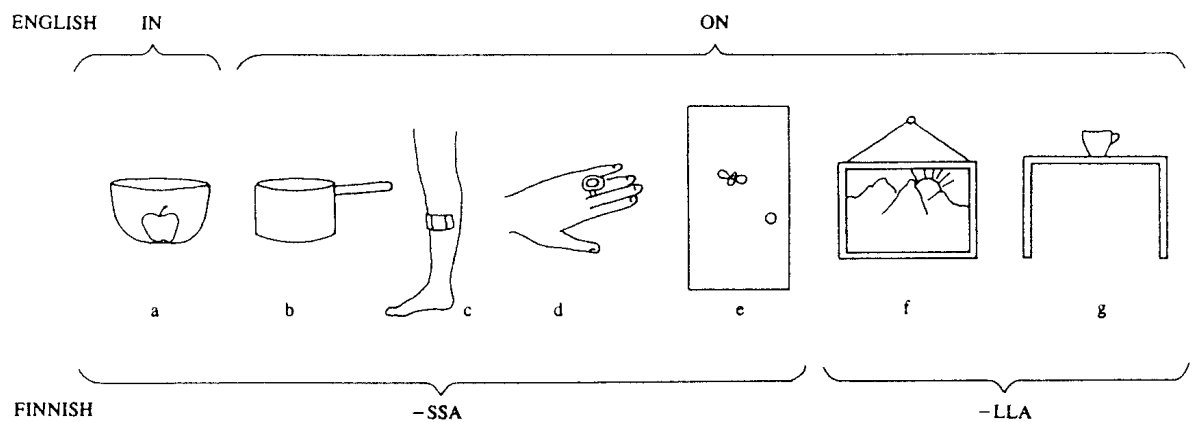


このような空間関係のカテゴリー化を見ると、注意してよいことは、われわれがどうも単純に空間関係のみでカテゴリー化していないということである。付着する力や支える力といった force を考慮して位置関係をカテゴリー化しているようである。force dynamics があらゆる認知ドメインに関わっていることを指摘したのは Talmy (1988) であった。Freyd, Pnatzer, & Cheng (1988) は、static situation (静的関係) が力の拮抗関係 (forces in equilibrium) として捉えられていると論じている。

物理的には「中」であっても *in* を使わない場合 (*the potato under the bowl*)、物理的には「中」にはない場合でも *in* を使う場合 (*the pear in the bowl*, *the bulb in the socket*) についても、なんらかの force が関与していると思われる (注5の図参照)。少なくとも単純に空間関係だけが問題になっているのではない。

さらにフィンランド語の場合を見てみよう (図16参照)。フィンランド語の場合も英語と同じように2種類にカテゴリー化するが、その境界が違う。英語では境界が(a)と(b)の間にあるのに対して、フィンランド語では、(e)と(f)の間にある。英語では、containment vs. surface/support の対立としてカテゴリー化されているということもできるが、Landau & Jackendoff (1993) の relative distance という概念を用いるなら、その相対的距離のどこに境界を認めるかで、英語とフィンランド語のカテゴリー化の違いがあるということが出来る。一方が他方の中に入っているとき両者の距離が一番近く、鍋の取っ手のように取り付けられているときも両者の距離は近いと言える。さらに、バンドエイドや指輪も簡単には取れないという点で両者は近い。ドアのハエも懸命にドアにしがみついている点で近いと言えよう。しかし、壁に掛けられた絵や、テーブルの上のカップは自由に取り外したり、傾けると落ちてしまうというような点では、距離があると言ってもよいかもしれない。有標性に関して、

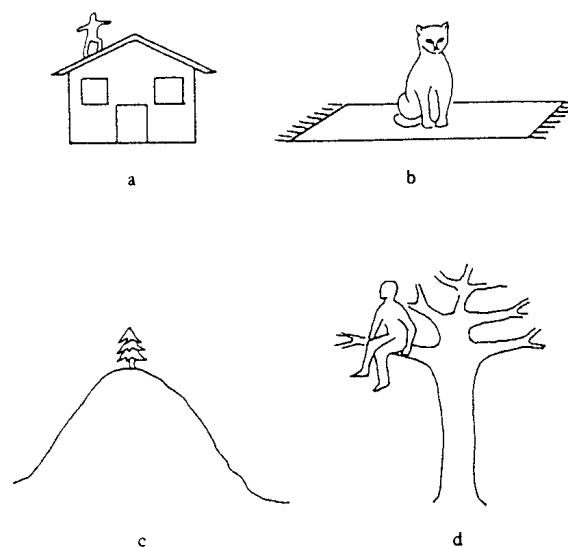
(16)



英語では containment が有標であり特別扱いされているのに対して、フィンランド語では、相対的距離のある関係を表す接格(adessive) -LLA が特別な関係であり有標で、より近い距離を表す内格(inessive) -SSA が無標である。

さらに興味深いのは、2つの物の位置関係が、物の形状を通してカテゴリー化される言語があるという点である。ミステク語 (Mixtec) では、次の図のような位置関係は、グラウンドとなる物の形状との関係で捉えられる。グラウンドの物体をメタファー的に捉えて、例えば、「家の背の人」、「マットの顔の猫」、「山の頭の木」とか「木の腕の人」というような表現で表される。また、2つのものは接触している必要はなく、例えば山の上を鳥が旋回している場合でも「山の頭の鳥」というような表現になる。

(17)



またテーブルの上にある物の形状によって、位置関係のカテゴリーの仕方が変わる場合がある。ツェルタル語 (Tzeltal) には「上」を表す一般的な前置詞 *ta* があるけれども、より specific な言い方をするときは、いくつかの位置動詞があってこれを用いて表現する。ボールのようなものが自然に置いてあるときに使う動詞 (*pachal*)、花瓶のようなものが立っているときに用いる動詞 (*waxal*)、平たい面を下にして置いてあるときの動詞 (*pakal*)、小さい球状のものがあるときの動詞 (*wodol*)、大きな球状のものがあるときの動詞 (*k'olol*)、小さい平べったいものがあるときの動詞 (*lechel*)、袋にものをつめておいてあるときの動詞 (*chepel*) などがある。

このような空間関係のカテゴリー化の多様性は次のことを示唆している。ボールにリングが入っているところやテーブルの上にカップがあるところを認識する際、子どもは2つのものの形、接触のあり方などさまざまな側面を意識することだろう。しかし、空間関係のどの側面をもとに空間関係がカテゴリー化されているかは始めから分かっているわけではない。そうすると、必然的に、子どもは言語に導かれて当該言語の空間カテゴリーを獲得していかなければならないという結論になる。

2.5 空間概念の多様性と認知相対論

色彩語の習得の場合と比較して見よう。色彩語の場合は、認知的にプリミティブな原色彩を中心に、それらが配合される形で、さまざまな色彩概念が獲得されていくということができるが、空間表現の場合、われわれが本来的に認識するプリミティブな原空間があって、その組み合わせでより複雑な空間概念を獲得していくというのではなさそうである。

われわれ人間に許容された空間関係のうち、どれが基本的ということではなく、さまざまな空間認識の仕方があって、ある認識の仕方が当該の文化社会で慣習化し、それが言語化していくのではないかと思われる。

強調しておく、色彩語の場合と違い、空間概念の場合は、なぜ言語主導になるのかということ、空間概念に focal spatial relations というものがないためである。あるいは三原色を中心的に捉える垂体細胞のようなものがないからだということである。原空間認識能力があってそれをもとに複雑な空間認識を行うというのではない。この点で、言語の空間表現と、色彩語との認知的体系は異なると言えよう。

一見、空間関係概念としても「上」や「中」はプリミティブな概念のようであるが、実は抽象化された概念だと言ってよいだろう。英語で *put on* と言

うから日本語の「(帽子を) かぶる」にも「上」の概念が入っているように思えるが、実はそうではなく、最初は単なる行為として理解されているのが、抽象能力や分析能力が発達した後の段階で、「かぶる」を分析的に捉えたときに「上」が意識されるのであろう。そうしてみると英語 *put on* の *on* の場合も、*put on a hat/shoes/gloves* (かぶる、履く、はめる) などから推察されるように「上」ということよりも「身体部分の表面」ということが問題になっている。認知主体が対象に接触するというより直接的なインタラクションを通して表面が意識され、そこから抽象的な関係概念である「上」が抽象されていくのであろう。また英語の *in* の場合も、空間的には「外」にある場合に用いられたり、空間的には「中」にあるのに *under* が用いられたりすることからも推察されるように、自然言語の語彙としての *in* が純粋な空間関係を表していないことは確かである。

空間関係概念が、どの程度認知相対的であるのか、結論を下すのは難しい。言語によってさまざまな空間関係の捉え方 (conceptualizations) がある場合に、空間関係を捉える普遍的な認知能力があつて、それらが部分的に相対的に活性化されて、それぞれの空間関係表現に反映しているのであれば、認知相対論的であるが、すでに見たように、空間関係の概念化はあまりにも多様で、空間関係を捉える普遍的な認知能力や認知プロセスの想定を許さないものである。

3. 結語

言語の系統発生のレベルでは、われわれの認知能力や認知プロセスを反映する形で言語は発生していくのであろうが、この側面の研究は認知文法等で体系的に研究されている。それに対して、特定の言語を子どもが習得するレベル、すなわち固体発生のレベルでは、当該言語に中心的に反映している認知能力や認知プロセスを、こどもがどのように習得するのか、そのメカニズムの研究も新たに必要になる。

とりわけ空間概念の場合、色彩の場合とは違って、単に脳内の認知能力による認知に限定されるのではなく、身体と環境世界の役割が大きな意味を持ち、脳内の認知能力とこれらの間のダイナミズムによって認知が成立するのであるから、いわゆる受身の認知ではなく、認知はイメージする(創発する)ものであると言ってよいかもしれない。さまざまな認識が創発するとき、普遍的な要素があるのかどうか、認識の多様性は普遍的な要素の何らかの組み合わせであるのかどうか、このような点の解明が認知相対論の新たな課題と

なる。(具体的には、子供が身体と環境世界とのダイナミズムを通じて空間概念を認識していくとき、認識の可能な創発パターンが有限個なのかどうか、そしてそのいずれかが言語を通して習得されるかどうか、ということが問題となる。) 空間認識の多様性に関する Bowerman(1996)のような綿密な通言語的研究は、そのような問題解決の大きな手掛かりになるはずである。いずれにしても認知相対論は、これまでのように単に脳内の認知能力や認知プロセスだけを問題にするのではなく、身体と環境世界とのダイナミズムを通して創発する多様な認知の中の普遍性を解明するようなものでなければならない。

身体や環境世界とのダイナミズムが、単に何に注目し何をプロファイルするかを変えるのではなく、活性化される認知能力や認知プロセスの重点を変え(それが個々の言語の構造変化などへと連動する)可能性も十分認められるからである。

注

1. 認知科学は目下、第3世代に入っている。最初が、伝統的な認知主義で、機能主義や古典的人工知能(AI)などがこれに入る。第2世代は、コネクショニスト(結合主義)の立場であり、ニューラルネットの理論はその例である。これに対してもっとも新しいのがイマージェンティスト(創発主義)の立場である。この立場では、これまで認知の周辺にすぎなかった身体や環境世界が、知性の「創発」を可能にする外部装置として、重要な意味を帯びてくる。
2. 引用文中の *mind* が池上訳では「こころ」であり、有馬訳で「頭」になっている点など興味深い点もあるので、有馬道子訳も挙げておく。

「我々は、母国語によって引かれた線に沿って、自然を分割しているのであるが、現象世界から取り出されたカテゴリーや型をそこに見出すのは、それらが、観察者を直視するからではない。そうではなく、世界は、われわれの頭によって——概して、頭の中の言語学的体系によって——組織化されるべき変転きわまりない万華鏡的な印象というかたちで提示されているのである。われわれは自然を分析し、概念化し、それに今日我々が与えているような意味を付与しているのであるが、それは、主として、このような自然の組織化への合意——我々の言語社会を通じて有効であり、我々の言語パターンに規則化されている合意——に我々が参加しているからである。この合意は、もちろん暗々裡の黙約的なものであるが、その約定は絶対遵守されるべきものである。その合意によって規定された資料の組織と分類に従わずには、我々はまったく一言も話せないのである。」(有馬道子『言語・思考・実在』南雲堂. p.233.)

3. まず①言語と思考が一致しているのではないということの直観的な側面が4点挙げられている。

- a 言葉にすることはしたけど、どうも言いたいことが十分言葉になっていないという思いをすることがある。言葉が思考と一致しているならこういうことはないのではないか。
- b. なにか聞いたり読んだりしたとき、わたしたちに残るのは要旨みたいなもので、各語の正確な意味ではない。
- c. 言語と思考が一致しているならば、新語が造語されることもないのではないか(既存の表現から独立して思考(意味)が生じるはずはないから)。
- d. 言語と思考が一致しているならば、言語間の翻訳が可能でなくなるのではないか。

次に②認知科学の観点から、思考が言語と一致していないことが示される。認知科学には、思考と言語の独立性を示す2つの手段がある、というわけである。一つは「言語を持たない生物の思考」についての一連の実験研究である。もう一つは、思考の仕組みについてのしっかりした理論の登場である。まず言語をなくしても思考が成立する事例をあげることによって、言語が思考を決定するのではないことが証拠づけられる。それに言葉を用いずに図形を頭の中で回転させるような「心的イメージで考える」ということもある。「チューリング・マシン」は、三段論法を、切り取りと移動と貼り付けというワープロソフトのいくつかの機能でやってのける。このようなことから「普遍的な心的言語の可能性」も十分考えられる。

- 4. ピンカーの批判には、イヌイットの雪を表す語彙についてのものがある。イヌイット語には、時としてさまざまな雪を表す語根が何百もあると言われることがあるが、実際はそうでないらしい。語り継がれていく内に話し百倍になった例の一つである。このような例で重要なのは、関心のある対象にはふつうよりも注目する度合が高く、対象をより細かく観察し、その細部の一つ一つを語彙化するということである。であるから、この場合も、イヌイット人の雪の語彙がたとえ膨大だとしても、それは言語が話者のカテゴリーを決定するというのではなく、われわれの関心の強さが対象を細分し記号化するということの現われであり、認知が言語を決定しているとでも言うべきところである。

5.



the pear in bowl

(a)



the potato under the bowl

(b)



the bulb in the socket

(c)

(Herskovits 1988 : 276, 279)

参考文献

- Berlin, B., and P. Kay. 1969. Basic color terms: Their universality and evolution. Berkeley: University of California Press.
- Bowerman, Melissa. 1976. Semantic factors in the acquisition of rules for word use and sentence construction. *Normal and deficient child language*, ed. by D. M. Morehead and A. E. Morehead, 99-179. Baltimore: University Park Press.
- _____. 1989. Learning a semantic system: What role do cognitive predispositions play? *The teachability of language*, ed. by M. L. Rice and R. L. Schiefelbusch, 133-69. Baltimore: Paul H. Brookes.
- _____. 1996. The origins of children's spatial semantic categories: Cognitive versus linguistic determinants. In Guperz and Levinson, 145-76.
- Choi, E., and M. Bowerman. 1991. Learning to express motion events in English and Korean: The influence of language-specific lexicalization patterns. *Cognition* 41. 83-121
- Clark, E. V. 1973. Nonlinguistic strategies and the acquisition of word meanings. *Cognition* 2. 161-82.
- Cromer, R. 1974. The cognitive hypothesis of language acquisition and its implications for child language deficiency. *Normal and deficient child language*, ed. by D. M. Morehead and A. E. Morehead, 283-333. Baltimore: University Park Press.
- Dixon, R. M. W. 1991. *A new approach to English Grammar, on semantic principles*. Oxford: Clarendon Press.
- Fauconnier, Gilles. 1997. *Mapping in thought and language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Freyed, J. F., T. M. Plantzer, and J. L. Cheng. 1988. Representing statics as forces in equilibrium. *Journal of experimental psychology: General* 117. 395-407.
- Gibson, E. J., and E. S. Spelke. 1983. The development of perception. *Mussen handbook of child psychology*, vol. 3: Cognitive development, 1-76. New York: John Wiley.
- Goldberg, A. E. 1999. The emergence of the semantics of argument structure constructions. *The emergence of language*, ed. by B. MacWhinney, 197-212. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Gunperz, John J., and Stephen C. Levinson. (eds.) 1996. *Rethinking linguistic relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Herskovits, Annette. 1988. Spatial expressions and the plasticity of meaning. *Topics in cognitive linguistics*, ed. by B. Rudzka-Ostyn, 271-97. Amsterdam/Philadelphia:

- John Benjamins.
- Hickmann, Maya. 2000. Linguistic relativity and linguistic determinism: Some new directions (Review article on Gumperz & Levinson 1996). *Linguistics* 38. 409-34
- 池上嘉彦. 1981. 「する」と「なる」の言語学. 大修館書店.
- _____. 2000. 「日本語論」への招待. 講談社.
- Johnston, J. R. 1985. Cognitive prerequisites: The evidence from children learning English. *The crosslinguistic study of language acquisition*, vol. 2: Theoretical issues, 961-1004. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Landau, B., and R. Jackendoff. 1993. "What" and "where" in spatial language and spatial cognition. *Behavioral and brain science* 16 217-38
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, image, and symbol*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- _____. 1999. *Grammar and conceptualization*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Lee, Penny. 1996. *The Whorf theory complex: A critical reconstruction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Li, Charles N., and S. A. Thompson. 1976. Subject and topic: A new typology of language. *Subject and Topic*, ed. by Charles N. Li, 457-89. New York: Academic Press.
- 中村 芳久. 1998. 認知類型論の試み: 際立ち vs. 参照点. *KLS* 18 (関西言語学会誌). 252-262.
- Needham, A., and R. Baillargeon. 1993. Intuitions about support in 4.5-month-old infants. *Cognition* 47. 121-48.
- 大田智加子. 1999. Review article: Lee, Penny. 1996. *The Whorf Theory Complex: A Critical Reconstruction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins xix+313pp *Bulletin of the Edward Sapir Society of Japan* 13 45-55.
- _____. 2000. The George L. Trager Papers におけるサピア、ウォーフ関連資料と若干の考察. 日本エドワード・サピア協会『研究年報』第14号. 101-108.
- Piaget, J., and B. Inhelder. 1956. *The children's conception of space*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Pinker, Steven. 1994. *The language instinct*. New York: Harper Collins.
- _____. 1997. *How the mind works*. London: Penguin.
- Rosch, E. 1973. On the internal structure of perceptual and semantic categories. *Cognitive development and the acquisition of language*, ed. by T. E. Moore, 111-57. New York: Academic Press.
- _____, and C. B. Mervis. 1977. Children's sorting: A reinterpretation based on the nature of abstraction in natural categories. *Readings in child development and*

- relationships (2nd edition), ed. by R. C. Smart and M. S. Smart. New York : Macmillan.
- _____, C. B. Mervis, C. Gray, W. Johnson, and P. Boyes-Braem. 1976. Basic objects in natural categories. *Cognitive psychology* 8. 382-439.
- Slobin, D. I. 1973. Cognitive prerequisites for the development of grammar. *Studies of child language development*, ed. by C. A. Ferguson and D. I. Slobin, 175-208. New York : Holt, Rinehart, and Winston.
- Talmy, L. 1988. Force dynamics in language and cognition. *Cognitive science* 12. 49-100.
- Tannen, Deborah. 1992. *You just don't understand: Women and men in conversation*. London : Virago Press.
- _____. 1994. *Talking from 9 to 5: Women and men in the workplace*. New York : Avon Books.
- Tomasello, M. 1999. *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Van Geert, P. 1985/6. In, on, under : An essay on the modularity of infant spatial competence. *First language* 6. 7-28.
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The semantics of grammar*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- _____. 1992. *Semantics, culture, and cognition : Universal human concepts in culture-specific configurations*. New York : Oxford University Press.
- _____. 1996. *Semantics: Primes and universals*. Oxford : Oxford University Press.
- _____. 1997. *Understanding cultures through their key words*. Oxford : Oxford University Press.